

8 週

ショートレポートから学ぼう

今週の目標：

- ・チームでショートレポートをお互いに評価しあう
- ・後半のチーム学習の規範を確認する
- ・『『学力低下』の実態』を読む分担を話し合う

演習 (1) チームでショートレポートをお互いに評価しあう

>>08-1-私のレポートを評価してください

チームメンバーに自分のショートレポートを評価してもらおう。それぞれのメンバーがまとめたショートレポートを評価し合いながら、チームで構想した学校について認識にズレがないかどうかを確認します。また、すでに個人的な主張が記述されている場合には、構想を改善するための手がかりになりますし、自分の主張を形成するときの参考にすることができます。自分のレポートを改善するために、チームメンバーのレポートから学び、誠意をもってコメントしましょう。(このショートレポートは最終レポートの第1章になります)

レポートを読んだら「08-1 私のレポートを評価してください」にコメントを記入して他のメンバーに渡しましょう。

演習 (2) 後半のチーム学習の規範を確認する >>07-3-チームの規範をつくろう2(チーム)

前回の講義で、これからの学習形態が前半のチーム学習(集合型)から後半のチーム学習(分散協力型)へと変化していくということを学びました(「07-1-後半のチーム学習」)。また、レンシオー二の「チーム学習の機能不全診断テスト」にメンバー全員が取り組み、チーム学習がどのような段階でつまづいているのか、またつまづきそうなのかを確認しました。これらを利用して、今後のチームが「分散協力型」で学習できるように、個人学習を強化するチーム学習の新しい規範を確認しておきましょう。

提出

07-3-チームの規範を作ろう2(チーム)

講義 (3) 個人テーマを決めるための準備をする

演習  
宿題

>>08-2-多様な学習者一人ひとりの学力を高めるために一國語，算数・数学

教育の長い歴史の中で、多くの先人たちが「子どもの学び」についてさまざまな原理を

開拓してきました(西之園晴夫・宮寺晃夫編「教育の方法と技術」第1章参照)。みなさんも、理想の学校を構想する中で学校教育の問題点や評価する視点についてチームメンバーと調べたり考えたりしてきました。これからは、一人ひとりが今までよりもさらに具体的に「子どもの学び」をどのように捉え、そしてどのような方法で子どもに関わるのかを考えていきます。

チームで意見を交わしやすくするために、「国語の学力」と「算数・数学の学力」という具体的な教科に限定して考えてみましょう。チームで共有するメインテーマを「さまざまな学力レベルにある学習者一人ひとりの学力を高めるための学習指導法を提案する(対象教科：国語，算数・数学)」と設定します。ここで「さまざまな学力レベルにある学習者」のことを以下では「多様な学習者」と呼びます。メインテーマに対して、自分ならどのように取り組むかということの後半のすべての週に渡って考えていきます。(その時に国語か算数・数学いずれかを選択します)

今週は、具体的なデータを使用して国語と算数・数学の学力の実態について説明されている、苅谷剛彦ほか「『学力低下』の実態」(岩波ブックレット)をチームで分担して読む打ち合わせをします。

**学習の手順の詳細は「08-2-多様な学習者一人ひとりの学力を高めるために—国語，算数・数学」をよく読んで進めてください**

次回までに

・2人以上でペアになって、「『学力低下』の実態」の第部にある6項のうち2項選択して熟読し、次週に他のメンバーに報告できるように準備する

1人1項ずつ担当する方法でも構いません

### 今後のスケジュール

- 8 週目 チーム内で中間レポートの評価 チーム内で構想した学校の認識のズレを確認  
共通テーマ「多様な学習者の学力を向上させる」(対象教科：国語，算数・数学)に対して、  
自分ならどのように取り組むかの個人のサブテーマを決める準備をする  
チームの課題：2人以上でペアになって、「『学力低下』の実態」の第部にある6項のうち2項選択して熟読し、次週に他のメンバーに報告できるように準備する
- 9 週目 チームの中で分担して読んだことを報告しあいながら、学力低下の実態について考える。共通テーマ「多様な学習者の一人ひとりの学力を高める」(対象教科：国語，算数・数学)に対して、自分ならどのように取り組むか(サブテーマ)を決める(最終レポートの第2章になる)  
個人課題：各自のサブテーマに即した情報を集めて自分の考えをA4で2~5枚でまとめる
- 10 週目 チームで「国語・算数・数学の学力を向上させるための本校の方針」を決めてまとめる  
チーム学習管理システムに提出：A4 2枚で「国語・算数・数学の学力を向上させるための本校の方針」を提出
- 11 週目 **第2回チーム発表**…学団内でチームレポートを発表  
提出したレポートをこちらが印刷しますので、それを使って他のチームに発表してください  
冬休み(課題：チーム学習の評価2 チーム発表の評価2 できるだけレポート執筆を進める)

## 私のレポートを評価してください

チーム番号( ) 月 日( ) レポート執筆者氏名( )

私のレポートを読んで下さりありがとうございます。私のレポートを読んでみて、よかった点と、改善を要する点を1点ずつコメントしてください。よろしくお願いいたします。

評価者氏名( )

「良かった、是非参考にしたい」という点：

「こうしたらもっといいよ」と感じた点：

評価者氏名( )

「良かった、是非参考にしたい」という点：

「こうしたらもっといいよ」と感じた点：

評価者氏名( )

「良かった、是非参考にしたい」という点：

「こうしたらもっといいよ」と感じた点：

評価者氏名( ) 「良かった、是非参考にしたい」という点：   「こうしたらもっといいよ」と感じた点：  
評価者氏名( ) 「良かった、是非参考にしたい」という点：   「こうしたらもっといいよ」と感じた点：  
評価者氏名( ) 「良かった、是非参考にしたい」という点：   「こうしたらもっといいよ」と感じた点：  

どうもありがとうございました。

## 多様な学習者一人ひとりの学力を高めるために —国語, 算数・数学

活動案内

後半の学習では主に「多様な学習者の学び」をどのように捉え、どのように関わるのかを考えます。そのために、チーム全体で「さまざまな学力レベルにある学習者一人ひとりの学力を高めるための学習指導法を提案する(対象教科: 国語, 算数・数学)」という共通テーマを持ちながら、最終的には個人で具体的なサブテーマを持ってまとめ、最終レポートの一部として提出します。

学習を次の4ステップで進めていきましょう。

**Step 1** 「『学力低下』の実態」の第 部を分担して読んで報告しあう 8週目・9週目  
「『学力低下』の実態」(荻谷剛彦ほか著 2002年 岩波書店)を各チームに渡します。分担した部分を読み、内容を要約した資料を用意してメンバーに説明します。

分担を決める

6項あるので、1人で1項担当して読むか、2人で2項担当して読むなど、どのように分担して読むか決めてください。

他のメンバーに報告するためにまとめる

それぞれが読んだ内容を報告して第 部を理解する

**Step 2** 1人ひとりが、メインテーマにどのように取り組むのか(個人のサブテーマ)を決め、ショートレポート(A4 2~5枚)にまとめる。 10週目

国語, 算数・数学のいずれかを選択する

サブテーマを明確にする

例: 「中学・国語で文章力を強化するために到達度評価を開発する」  
対象者(誰に) 具体的な学力(何を) 方法(どのように)

Step1 で得た知識を利用しながらサブテーマについてショートレポートをまとめる

- ・「国語の学力」, 「算数・数学の学力」をできるだけ明確に定義する
- ・インターネットや文献などから、国語や算数・数学の学力を向上させるための具体的な取り組みの例
- ・「さまざまな学力レベルにある学習者一人ひとりが学ぶために、自分ならこうする」という提案

**注意 必ずプリントアウトして次週持参してください。**

Step2 でまとめた個人のショートレポートを輪読してコメントしあう

**Step 3** 第2回チーム発表で「多様な学習者の国語，算数・数学の学力低下に対する本校(構想した学校)の方針」を他のチームに説明する 11 週目

Step3 までの内容を踏まえて、再びチームで構想した学校を展開する。テーマは「さまざまな学習者の国語，算数・数学の学力低下に対する本校の方針」

の内容をチームで A4 で 2 枚にまとめて学習管理システムに提出(時間厳守)  
学習管理システムに提出されたチームレポートを用いて学団ごとで発表

**Step 4** Step 3 までの学習を見直して最終レポートの第 2 章としてまとめる 11 週目～

Step3 までの学習を総括して、最終レポートの第 2 章として A4 5 枚以上でまとめる。  
その他の章と合体させて最終日に学習管理システムに提出する。

第 2 章は最終レポートの中でも一番重要な位置を占めているので、冬休みを使って見直すなどして時間をかけてしっかりまとめていきましょう。

## 日本の子どもの学力

PISA2003 と TIMSS2003 を読み解く

わが国は 20 世紀においては世界でもっとも教育に成功した国でした。それは江戸期に庶民教育としての手習い塾あるいは寺子屋が発達していましたが、明治時代になっても庶民の教育熱は高いものがありました。明治初期に京都では町衆が自分達で学校を設置するなどの活動があり、その後わが国の教育は発展の一途をたどりました。それは社会が安定し、経済も発展する時代において成功した教育でした。

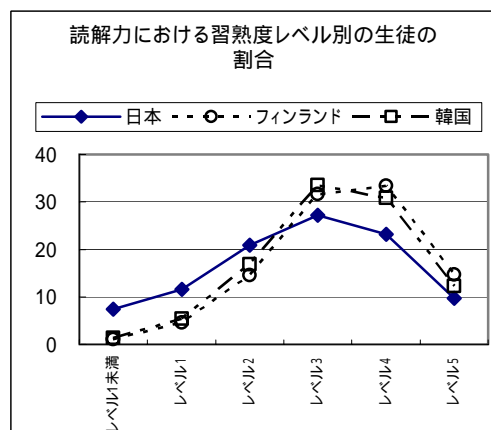
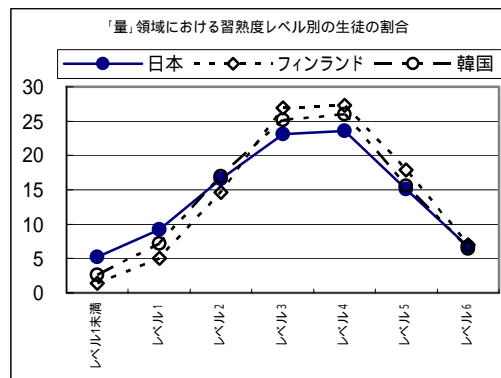
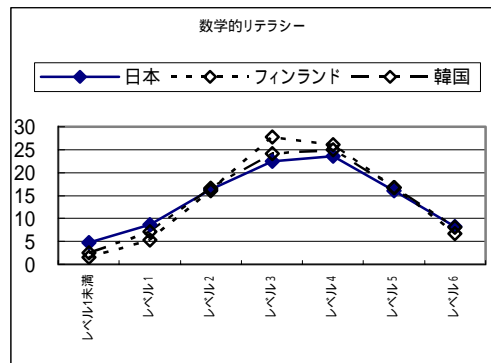
しかし 21 世紀を迎えてその前提があやしくなっています。それは社会が絶えず変動し、さまざまな背景と経験をもつ多様な人々が教育にかかわり、入学してくる児童生徒も多様になってきているのですが、そのような状況に適應できる教育になっているかどうかという問題です。従来とはまったく違った社会になったとき、これまでの優等生であった日本の教育制度がうまく機能するのかどうかということが問題になっています。しかしこのような事態は日本だけの問題ではなく、世界の国々が当面している問題でもあります。

昨年暮れにパリに本部のある OECD(経済協力開発機構)が発表した「生徒の学習到達度調査(PISA)」の 2003 年調査の結果が公開されました。さらに国際教育到達度評価学会(IEA)が実施した国際数学・理科教育動向調査の 2003 年調査(TIMSS2003)が公開されて、その結果が話題になっています。この 2 つの調査のデータを使用して、わが国が当面している問題を考えてみましょう。

調査結果のデータから代表的なものだけを選んで、解析した結果を紹介します。この調査は 15 才の生徒、わが国では高校 1 年の生徒の学力を読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーを主要 3 分野として調査したものです。すなわち生徒達は義務教育相当(国によって違いがあります)をどのような学力を習得して修了したかを調査したものです。以下のグラフはいずれも学習到達度調査 PISA のデータから作成しました。このようなデータを解釈するときには重要なのは、どのような視点で情報を読み取るかです。新聞報道などでは世界で何位であるかということしか報道されません。それによると数学的リテラシー全体では 1 位グループです。「量」領域は 2 位グループ、「空間と形」領域は 1 位グループ、「変化と関係」領域は 1 位グループ、そして「不確実性」領域では 2 位グループとなっていて、依然として上位を占めています。読解力では 14 位とかなり低いことが明らかになって話題になっています。しかしもっと気になることは、その成績の分布と年度にみられる変化の状況です。今回の調査で特に注目されるのはフィンランドと韓国ですが、それと日本とを比較してみました。数学についてこれらの国と調べてみるとレベル 1 未満、レベル 1、レベル 2 などでは日

本より低い割合です。すなわち下位の成績の子どもの割合が少ないという点です。

教育レベルの平均点が問題になるときに、高いレベルの割合を増やすことに力をいれるのか、あるいは低位の子どもの指導に力をいれて平均値を高めるのかが問題になります。最終的には平均値ですからどちらに力をいれても順位は上昇します。すなわち学力を向上させるといったときに、上位の子どもだけでなく低位の子どもにも力を入れることが大切であるということに気づきます。変動する社会にあっては、その社会からの脱落者を出さないためには下位の子どものための配慮がとくに大切です。なかでも読解力が低いことはその後の学習に大きな支障となることが予想されます。これまでわが国の教育は、均質な子どもにたいしてとくに格差のない教育が行われてきたと信じられているのですが、その前提が成り立たなくなっています。低水準であるとみなしているのに、その水準に達している割合を問題にしています<sup>1</sup>。以上のような視点からまとめると、15才までの教育の成功率は下の表のようになります。これによると日本とフィンランドの間にはかなりの教育格差があるといつてよいでしょう。



	数学的リテラシーレベル2以上	「量」領域のレベル2以上	読解力のレベル3以上
日本	86.6%	85.1%	60.1%
フィンランド	93.2%	93.4%	79.8%
韓国	90.4%	90.2%	76.5%

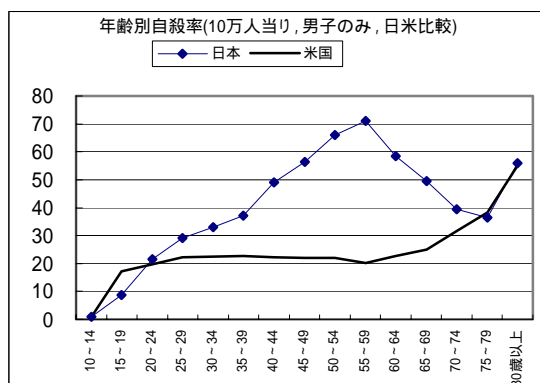
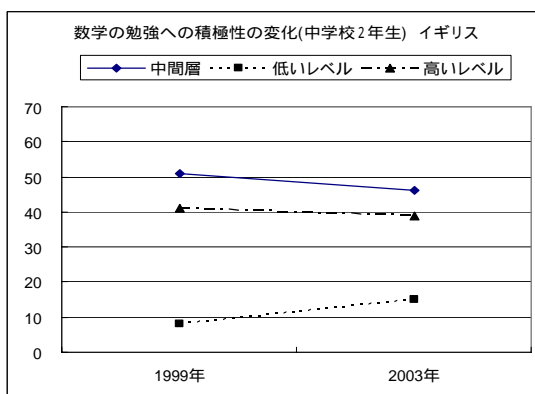
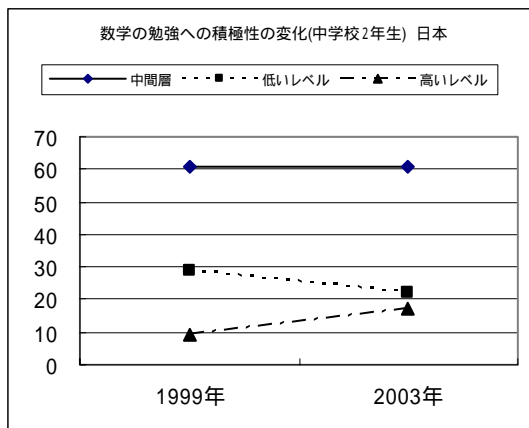
<sup>1</sup> <http://www.minedu.fi/minedu/education/pisa/results2003.html>



次に示したのは「数学の勉強にたいする積極性」の変化の様子ですが、日本では高いレベルの子ども達は積極性が高まっていますが、低いレベルの子ども達ではむしろ下がっています。すなわち高位レベルと低位レベルの2極化が進みつつあります。ところがイギリスでは低位グループの子ども達が積極性を高めています。イギリスでは学年制を廃止してレベル制にしましたが、どのようなレベルであっても自分の実力に見合った学習ができるようになってきているのです。どのレベルの学習をするかは自分で決めることができるのです。そのような学習形態は、学年制を存続したままでも実現できますから日本でも可能です。

情報社会は失業と転職が日常化する変動社会ですが、男子の自殺者での10万人当たりでは中高年でアメリカの3倍以上であり、しかもその理由は生活・経済問題なのです。いまヨーロッパの教育改革で問題になっているのは持続的雇用可能性(Sustainable employability)をどのように確保するかです。また16-24才での失業者、不本意な就職者、ホームレスにたいしてどのようなメディアを利用すればアクセスできるかということから若者達のためにケータイを利用したm-learningの研究が進められています。先進国が取り組んでいるのは、このように変動社会に適應できない人達のためにどのようにICTを活用するかという問題です。成績の順位や設備充実率にこだわるのは発展途上の教育政策でしかありません。

わが国では習熟度別クラス編成を実施したり、学校教育に競争原理を導入しようと



Honkawa Data Tribune 社会実情データ図録  
<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/>より作成

する動きがあります。しかし、さまざまな実力の人が入り混じっても、先輩のしぐさや動作を見てお互いに学ぶということは、日本古来の稽古事や武道などでの教育方法でした。正統的周辺参加はわが国の伝統的な学びにあった当たり前のことです。師匠もさまざまなレベルの人に合わせて指導することはごく普通のことと考えられていました。最近の情報通信技術の発達により、学習者が相互にコミュニケーションでき、多人数であっても学習を自己管理することを可能にしています。このような状況から考えても、学習は他人との競争ではなく、自律と協調を基盤として一人ひとりが自分の能力の限界に挑戦するような学習環境と、お互いに尊敬し合いながら協働するチーム学習を実現することが大切です。では教科の指導で具体的にどのようにすればいいのでしょうか。